

『アナロジア AIの次に来るもの』

ANALOGIA The Emergence of Technology Beyond Programmable Control by George Dyson 2023

橋本 大也 HASHIMOTO Daiya

デジタルハリウッド大学 教授
Digital Hollywood University, Professor

大学時代にフリーマン・ダイソンの『多様化世界』（1990年、みすず書房）を読んだ。蝶の変態と超弦理論から始まる難解な本だったが、20世紀を代表する天才物理学者の深遠なビジョンに大いに刺激を受けた。まさか33年後にその息子の科学史家ジョージ・ダイソンの『アナロジア』を自分が訳すことになるうとは、何かのバタフライ効果がはたらいた。

『多様化世界』について評論家の立花隆は、当時の書評で「私は、フリーマン・ダイソンの愛読者で、この人は現代と未来が最も良く見えている人だと思っている」と書いた。私はこの形容をそのままジョージ・ダイソンに使いたい。ジョージの姉で『未来地球からのメール』を著した思想家エスターとともに、ダイソン家には賢慮とビジョナリーの血が確実に受け継がれている。

カナダのプリティッシュ・コロンビア州南西部のフィヨルドに、イギリスの探検家ジョージ・バンクーバーが命名したバラード入り江はある。高校を中退した16歳のジョージ・ダイソンはこの入り江に立つベイマツの地上30メートルの場所に、自ら切り出した木材でツリーハウスを作り、その上で3年間を過ごした。

「電話もパソコンもインターネットも、そして電灯すらない生活で、考える時間は計り知れないほどあった。ふと、木が考えることがあるとしたら、一体何を考えているのだろうと思った」

冬には氷点下の厳寒に晒され、風速30メートルの突風に揺さぶられ、ムササビの侵入と戦いながら、ダイソンは丸太の年輪を数えた。木の成長はアナログで連続的なのに、年輪の数は1年に1本ずつデジタルの論理で増えていく。自然は0と1とは別の原理で世界をコントロールしているのではないか。

『アナロジア AIの次に来るもの』は、われわれが謳歌しているデジタルの時代がまもなく「灰も残さず」終焉し、超アナログの「千年王国」がやってくると語る少し大仰なトーンの予言書である。しかしノストラダムスのようなオカルトでは決してない。ダイソンは歴史家である。18世紀にライブニッツが発明したコンピュータの祖型から、21世紀の最新のAIが生まれるまでを4つの時代に分け、論理的な演繹の結果として結論にたどりついた。

直近のAIの進化は顕著だ。会話AIのChatGPTは人間のように会話し、人間よりも博学な文章を書く。お絵描きAIのStable Diffusionは、人間のデザイナーの仕事に本当に奪い始めた。予想外の進化に開発者たち自身が驚いている。思い通りではなく思った以上にAIが独り歩きを始めたのだ。

「人工知能をプログラムして思い通りに動かすことができると信じることが、神と話すことができる人がいるとか、ある人は生まれつきの奴隷だと信じるぐらい、根拠のないものであることがはつきりするだろう」

『アナロジア』を読む者は、デジタルAIが人間の能力を超えるのではないか、仕事を奪われるのではないか、という、お決まりの懸念を完全に吹き飛ばされる。ダイソンにしてみればデジタルの小賢しい力など「川を泳ぐ小魚」に過ぎない。英語の副題は「プログラム可能な制御を超えたテクノロジーの出現」(“The Emergence of Technology Beyond Programmable Control”)だ。目先のAIに一喜一憂する必要はない。心配すべきはその次に来る、もっと強力でもっと恐ろしいかもしれない世界の方なのだから。



『アナロジア AIの次に来るもの』

早川書房 2023/5/20発売 3300円(税込み)

ジョージ・ダイソン(著)、橋本 大也(翻訳)、服部 桂(監修)